

会議名	第34回日本短角種研究会
開催日時	平成19年11月15日 13:30 - 17:30
開催場所	秋田県鹿角市(鹿角パークホテル)
主催者	日本短角種研究会 日本短角種振興協議会
参加人数(概数)	95名
1. 会議の概要 (資料添付)	<p>研究会では次の4名による講演並びにそれに対する質疑が行われた。</p> <p>1 料理研究家から見た日本短角種の魅力 K-Yキッチン主宰者 料理研究家 黒川陽子</p> <p>講演要旨 講演者は、日本の牛肉評価におけるサシ信仰には違和感を覚えていた。メディアが霜降り牛肉はおいしいとの情報を流しているが、問題である。5年前に短角を知った。短角の肉は肉そのものの旨さを味わうものと思う。肉の脂肪含量は少ないから、料理には工夫が要る。特徴を生かさなければならない。 海外を経験した料理人はサシの入った牛肉ではなく、赤身牛肉を探している。短角は赤身牛肉だけでなく、健康で、環境と調和した生産方式をとっているところも宣伝すべきだ。生産現場を知らない料理人が多い。 課題は、短角の存在が知られていない、特徴についての情報もない、短角の特徴を生かす料理法が知られていない、肉の品質は一定していない、供給量が少なすぎる、など。</p> <p>2 日本短角種の肥育と肉色 岩手大学準教授 村元隆行</p> <p>講演要旨 短角の肉の評価が低い原因として、霜降りになりにくいということのほか、肉色が悪く、貯蔵中の変色が速い、などがいわれている。しかし、調べると、枝肉格付けにおける肉色の評価はたしかに劣るが、貯蔵中の肉色の変化は黒毛和種より少なく、安定していた。 肥育仕上げを放牧で行った場合、好酸化ビタミンが増加し、ドリップロスが減少した。一方、易酸化性脂肪酸の割合が増加し、貯蔵中の肉色安定性が低下した。</p> <p>3 北海道の日本短角種の現状と(有)北十勝ファームの拡大計画 (有)十勝ファーム ファームマネージャー 上田金穂</p> <p>講演要旨 北海道における短角は、十勝では明治19年晩成社が乳用として導入、えりも町では漁師の生活安定を目的として明治28年導入、等の記録があるが多くは第二次大戦後の導入である。平成3年に最大3300頭にまで至ったが、平成18年現在は860頭。(平成3年は牛肉が輸入自由化された年。)</p>

	<p>北十勝ファームは足寄町に放牧草地32ha、山林等20haを擁し、現在短角310頭、その他計190頭を飼育している。釧路及び上の国町の牧場でさらに短角繁殖牛を200頭程度増やす予定。短角を増やす理由は、牧場では離農した酪農家の草地を入手するなど広大な草地が利用できることと、昨今の飼料高では自給飼料で飼育する短角肉の競争力も高まると考えるからだ。</p> <p>道内各地に牧場を点在させるのは伝染病対策でもあり、リスク分散のためでもある。価格が安いので雌の廃牛を繁殖用に購入する。妊娠牛も市場に出るのでこれは買い物だ。課題は雄牛の確保。</p> <p>4 鹿角地域における日本短角種の現状と課題 鹿角畜産農業協同組合業務課 佐藤実幸</p> <p>講演要旨</p> <p>南部牛は尾去沢鉱山産出の銅や三陸沿岸からの塩を駄載運搬する牛として重要であった。近年では、特に牛肉の輸入自由化以後は短角の価格低迷のため、徐々に黒毛和種に置き換えられている。現在の短角繁殖牛頭数は約200頭。鹿角畜協では短角にこだわらず、黒毛和種、褐毛和種、ホルスF1等の振興に努力している。かづの牛としては短角肉を、乾燥肉、ハンバーグ、ウイナ、学校給食などとしての販路開拓に努力している。</p>
<p>2 .今後の研究開発分野として重要と思われる課題・話題</p>	
<p>3 .その他の発表課題で関心のあったもの</p>	
<p>4 .今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等</p>	

<p>5 . 会議の所感</p>	<p>日本短角種研究会は生産者、流通業者、技術者、研究者などの間で情報交換を進め、もって短角の振興に資する事を目的に設立された。毎年秋に研究会を開催し、年1回会報を刊行している。事務局は発足以来東北農研に置かれている。</p> <p>私は平成16年に10数年ぶりに研究会に参加して以来、今回で3回目であるが、今回の研究会の講演並びに討議は前向きなものであった。これまでの研究会では、ともすれば情緒的論議が多く、内輪の論議でしかなかった。いい牛、うまい肉であるのに評価が低い・・・などなど。評価が低いのを他人のせいにしては進歩に結びつかない。黒毛和種と同じ土俵で相撲を取るのか、あるいは全く異なる土俵を作ろうとするのか、覚悟が定まっていない。繁殖雌牛の頭数として5000前後という事態を受けて、政策として何を求めるのか、技術としては何か、生産者側の発言が必要であろう。誰かが何とかしてくれるだろう、と言う期待に応えるほどの余裕は今の自治体にはないと思う。</p> <p>北海道の上田氏は、廃業した酪農家の土地を積極的に利用し、今後の飼料高を見越して自給飼料主体で肉牛生産を行うために短角を選択すると発言していた。会場地元の佐藤氏は畜産振興が重要だから、短角にこだわらず、黒毛も褐毛もF1もすべて重要と言っていた。短角研究会で短角にこだわらないという発言はある種の勇気が要るものだろう。料理研究家の講演は、私のように料理本など読んだことのない人間には分かりにくい。料理も、ファッションの世界、音楽の世界と同じく感覚が重要なのだろう。うまいかうまくないかは、会食の相手と自分の舌が決める、と考えている人間には、どんなにえらい料理研究家の話も通じない。具体的な表現がほしい。</p> <p>なお、家畜改良センター奥羽牧場長からは、種雄牛の供給は今後も継続する旨懇親会で話していた。期待したい。</p>
<p>報告者</p>	<p>松川 正</p>